1分間に17人（内12人が子ども）
1日に2万5,000人
1年間では約1,000万人が
飢えのために生命を失っています。

一般財団法人
日本国際飢餓対策機構

2017 3 No.320

飢餓対策ニュース

わたしから始める、世界が変わる

子どもと家族の支援プログラム「ふくしまHOPEキャンプ」

明日を生きる原動力

日本国際飢餓対策機構　伊東　綾（東北担当）

６年前の３月11日、激しい余震と津波で人々が命の戦いを続けている被災地で、110人を超える新しい命が産声をあげました。ライフラインの緊急停止、多数の怪我人、原発事故への対応などに医療現場が大混乱している中、懸命に母親を励ます医師や看護師、家族によってその命は生まれました。母親たちは「この子が大きくなったら、どんな状況の下で生まれたのかを必ず伝えます」と口々にメディアに語っていたのを思い出します。

震災と津波によって数え切れない人々の命が失われ、絶望感が広がる中で、新しい命誕生のニュースに多くの人は希望の光を見出せました。その子どもたちもこの春には小学生になります。ただただ元気で健やかに育って欲しいと願います。

被災地は急速に復興に向かい、町も人も大きく様変わりしています。宮城県では、被災者の大半が復興公営住宅や再建した自宅に移り、仮設住宅に残っている人の数は本当に少なくなっています。復興支援の一環で作られた仮設商店街のお店も、次々に新設された商店街に移り、事業を営んでいる方々の再チャレンジも本格化してきています。ただ、そのような事業者ばかりではなく、やむなく廃業や事業転換を余儀なくされた場合も少なくありません。様々な形で一人ひとりのペースで復興の道はまだ続いています。

それでもこの６年それぞれが半歩、一歩と前に進むことができたのは、多くの人々の励ましと支援があったからです。被災地で生まれ、あの日の後に当機構の一員に加えていただいた私にとっても、大勢のボランティアの方々や見えるもの、見えないもの（物心両面）の支援が、明日を生きる原動力となりました。

私たちにできることには限りがあります。しかし小さな手でも、様々な違いを認めつつ結び合うことで力強い愛が実践されていくことを私たちは知っています。今も世界には飢餓に苦しむ人々８億人、小学校にさえ通えない子どもは5,900万人。ハンガーゼロ＝飢餓のない世界の実現はまだまだ険しく思えますが、東北でそうであったように、一人ひとりを支援し励ます取り組みは着実に成果を表しています。私たち自身が希望を失わず手を伸ばし続けるなら、それは必ず誰かの生きる希望となるのです。

「もしひとりなら、打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる」（聖書）

2016年
被災

フィリピン台風 緊急支援レポート

ハンズ・オブ・ラブ・フィリピン 代表 酒井　保

仮復旧工事中の被災者ビルマさん宅

2016年12月、大型台風26号がフィリピン中部を通過、28日には132, 908家族（602,770人）が被災しました。ミンドロ島近郊を通過した26日以降、カラパン市近郊は停電となりスタッフと連絡がとれなくなりました。その後、29日午後に連絡が再びとれるようになりましたが、停電は断続的に続いているとのことでした。その時点でフィリピン人スタッフおよび家族は無事、家財にも大きな被害はなかったとのことでした。30日には山間部にある支援地のシド村、マイ村ともに大きな被害がないことが確認できました。

現地スタッフはその後、市役所や緊急支援を担当する社会福祉開発局を訪れ、情報収集を行いました。そしてカラパン市内の市街地においては大きな被害はなかったものの、周辺の貧困地域で家は半壊、倒壊が多数あったとの情報を得ました。

村長を訪ね今後について話す酒井代表

その情報に基づいて30日、海沿いにあるバランガイ　Maidlang（マイダラン）村を訪問しました。この村は主に漁業と野菜栽培で生計を立てている地域で、住民の約３０パーセントが政府から就学補助を受けている貧しい村です。調査の結果、265家屋のうち59家屋が失われたことがわかり、村長さんと協議の上、家屋の仮修復のために釘（2インチ）とワイヤー、コンパネをこの59世帯に配布することを決定しました。年末年始で物資調達と配送の手配が進まず、最終的に1月10日に配布、それまでに自力での復旧も進んでおり、自助努力で早急の復旧が難しい38家屋の支援を行いました。

農家の収入減が深刻に

1月11日には、昨年地滑りで被害があったバコ地域を再度訪問。被災状況の聞き取りをおこないました。結果的に大きな人的、家屋の損壊はありませんでしたが、風雨と洪水による農作物の打撃が大きく、特に換金作物の被害が大きいことがわかりました。これから先、現金収入の不足による食糧不足が懸念されており、追加支援について皆様のご協力が得られれば感謝です。対象地域、家族の詳細は現在調査中です。

自分たちでなんとかしたい

被災した村の村長さんからは、「今回の支援を心から感謝します。支援者の方々によろしくお伝え下さい。しかしながら、被害の軽減の為に私たち自身に出来たことがあったはずです。今後はそれができるよう、ご支援いただけるとさらにありがたい」との言葉を

支援により復旧した住人の家屋

いただきました。

フィリピンで繰り返される災害被害に対して、以前はただそれを受け入れてきただけの人たちに、自分たちでなんとかしていかなければという思いが起き始めています。今後は、そういう思いの人たちを支えるような支援を続けていければと願っています。

フィリピン台風緊急支援募金にご協力下さい!!

募金方法は、郵便振替の場合は「フィリピン台風」と明記。又ウエブサイトから、クレジットカードやコンビニエンスストアのデジタル決済もお選びになれます。

【台風30号の被害】死者6,201人、負傷者28,626人、行方不明者1,785人、家屋114万戸余が倒壊し、農業・漁業などにも大きな被害をもたらしました。(2014年1月14日時点)

2015年8月に校舎が完成、現在は2つめの校舎を建設中です。2017年3月に現地を訪問予定です。

2013年
被災

台風被害の学校再建を

バルナバプロジェクトの取り組み

2013年11月の巨大台風30号（現地名：ヨランダ）は、フィリピンのレイテ島やサマール島に甚大な被害をもたらしました。当機構は皆さんのご協力を受けて、食料や復興支援ボランティア派遣をはじめ様々な支援活動をさせていただきました。

大阪シオン教会のメンバーと現地を訪問した時は被災から半年以上経っていましたが、トタン屋根の崩れかけた家々やブルーシートで覆われた屋根が目に飛び込んできました。現地スタッフの話によると「実はどこまでが台風被害で、どこまでが元々のバラックか区別がつかない」とのことでした。元々貧しい地域が、災害に遭って壊滅的な被害を受けていたのです。

特に沿岸部にあった学校は、台風による高潮や暴風によって建物が大きな被害を受け、子どもたちは仮校舎の狭い教室にすし詰め状態で授業を受けていました。この現状を見た大阪シオン教会の若者たちは、被災地に学校を建設しようと「バルナバプロジェクト」を立ち上げました。様々な取り組みをして学校建設の募金を呼びかけています。今回はメンバーの一人、笹島百合さんに報告をしていただきました。（JIFH吉田知基）

2014年３月の現地視察の様子

誰かに伝えたい

笹島百合さん（大学生）

子どもたちと紙飛行機遊びをする笹島さん

私は2014年3月、高校三年の春休みに初めてフィリピンを訪れました。それは台風被害の爪跡がまだまだくっきりと残っている時でした。その時に印象に残ったものが二つあります。それは貧困と笑顔です。私たちが訪問したレイテ島やサマール島の人々は想像以上に貧しく、彼らの住まいや生活環境は目を覆いたくなるような状況でした。本当に何もないのです。それでも子どもたちの笑顔はとても素敵で、彼らの笑顔のために何かしたいと思わされたのです。そして始まったのが壊れた学校を再建する「バルナバプロジェクト」です。

大学の授業で発表する様子

今は事あるごとにこの活動をＰＲしています。昨年は、大学の授業の中で「バルナバプロジェクト」の活動を紹介する機会が与えられました。また学園祭では貧困や飢餓について知ってもらうために、JIFHさんの協力を得てフェアトレードの講演、販売を企画しました。同世代の人に貧困の現実を知ってもらいたいと考えています。もしこのプロジェクトがなければ、私は自分から誰かのために行動することはできなかったでしょう。これからも自分たちにもできることがあることを伝えていきたいです。

オリジナルの応援ソングCDを販売し活動資金に

バルナバプロジェクトについては大阪シオン教会 Tel:072-964-5144まで

2015年クリスマス募金による支援

ルワンダの東部、ガツィボ地方のニャギハンガ地区という地名をご記憶の方はおられるでしょうか。2015年のクリスマスに皆さんがご支援くださった100戸の農家が暮らしているところです。ごく狭い農地で少しでも多くの作物を収穫しようと、頑張れば頑張るほど収穫物の質も量も落ちてしまう…そんな悪循環に途方に暮れていた農家の人々が、皆さんの温かいご支援によって農業トレーニングを受けることができました。新たな知識や農具を手にしてから1年が過ぎた今、ニャギハンガ地区の農家の皆さんはどうしておられるでしょう。

成長を始めたニャギハンガ地区の農家

選ばれた100戸の農家の皆さんは家畜管理のトレーニングを受けた後、山羊プロジェクトを始めました。山羊の糞から堆肥を作って畑の生産性を上げ収入を向上させる目的で、最も必要のある28人がまず選ばれ、1戸当たり2匹の山羊を提供されました。子山羊が生まれたら次の人にあげるという約束です。

良い種を蒔きそれから採取して生産するという持続可能のトレーニングも行われ、みんなが同じものを生産して値崩れを起こすのを避けるため、メイズ（とうもろこし）、人参、他の野菜など農家ごとに違う種が提供されました。良い収穫、良い採種ができるよう国際飢餓対策機構（以下FH）の現地スタッフが行政の農業専門家と協力して、引き続き様子を見守っています。

また、収穫があがって手にしたお金を有効に使えるように、貯蓄・金銭管理のトレーニングも並行して実施され、100戸の農家は4つの貯蓄グループを形成しました。まだ始まって間もないため、少額ではありますが、着々と貯蓄の習慣が根付いています。近い将来、メンバー間で資金の貸付を行い、それを元手に自分たちでもっといろいろなことをしていこうというビジョンを抱いています。

積極的に実践する農家

トレーニングで学んだ知識を活用してよりよい農法を実施していけるように、100戸の農家は行政の農業専門家から助言を受けることができるようになっています。

また、FHの現地スタッフがこれまでに50戸の農家の畑を回っていますが、多くの農家がマルチング（雑草の発生、水分の蒸発や病害虫の発生を防ぐため、わらやビニールで耕地をおおうこと）や無耕農業などトレーニングで学んだ方法を積極的に実践しています。残念ながら日照りによる水不足が起こり、穀物の生産高に影響が出ているようですが、農家の皆さん

子どもに焦点をあてる地域変革

飢餓と貧困に苦しむ地域社会の中で、最も弱い立場に置かれているのは子どもたちですが、その生活環境に大きな影響を与えているのは、周りの大人です。経済的な側面だけでなく、人権や価値観、人間関係など目に見えにくい側面での大人たちの変化が貧困問題の根本解決には欠かせません。

コミュニティ全体の衛生･栄養状態の改善、収入の向上と貯蓄の推進、教育への理解の推進、防災･減災への取り組みなどが、子どもたちの健やかな成長につながります。包括的な地域開発をその地域の大人たちが自ら進めていく過程に、寄り添って共に歩む、人財育成中心の支援を日本国際飢餓対策機構は、世界中の国際飢餓対策機構と協力して行っています。

貧困に立ち向かうカリンバさん

は頑張っています。

100戸の農家のうちの1人、ニャギハンガ地区ニャギタビレにあるマタバ村のカリンバ・アナスタセさんは、皆さんのご支援で、改良型農業の実践と貯蓄・金銭管理能力のトレーニングを受け、手押し車、噴霧器、ジョウロ、鍬など学んだことを実践するための農具や種を手にすることができました。

「ご支援で手押し車を頂いたので、山羊の糞で堆肥を作り農地に運んでいます。また噴霧器やジョウロを使って作物に水をやることもできます。おかげで家族の生活が大きく改善されました」とカリンバさんは言います。山羊の糞を使った堆肥のおかげで土地の生産性があがり、この前のメイズの収穫では、40万ルワンダフラン（約56,000円）の収入があったとも語っています。そのお金で牛を買い、バイオガスが作れる設備を設置するという大きな投資をしました。

手押し車で堆肥を運ぶカリンバさん

メイズの収入で牛を購入

灌漑をして収穫増を実現

トレーニングには灌漑の知識も含まれていました。雨が降らない乾季に土地がカラカラに乾いてしまい、人々が雨を待ち焦がれている中、カリンバさんはモーターポンプを借りてメイズ畑を灌漑しました。そのおかげでカリンバさんの畑ではメイズがすくすくと育っています。このメイズを収穫したら、そのお金でモーターポンプを買うんだとカリンバさんは展望を語るようになりました。

カリンバさんは、トレーニングを受けることができてとても感謝しています。中でもマルチングは大いに役立っていると言います。

カリンバさんはまた、TURWANYE UBUKENE（貧困と闘おう）という名前の貯蓄グループに所属しており、トレーニングを通して将来のために貯蓄することを学んだと言います。25人のメンバーに選ばれて今では会長の役を務めています。

マルチングで立派なバナナができました

バイオガス設備に投資

貧困の連鎖を断ち切ろうと歩み始めたニャギハンガ地区の農家の皆さん。日本国際飢餓対策機構では、2017年も引き続き持続可能な生活の質の向上に向けたその歩みを応援していきます。皆さんの温かいご支援をお願いいたします。

ルワンダの農家を応援してください

募金目標150万円

募金は、郵便振替00170-9-68590
日本国際飢餓対策機構
※記入欄に必ず「ルワンダ」と明記ください。ウエブサイトからはクレジットカードで募金ができます。お問い合わせは大阪事務所まで。

救缶鳥 食料備蓄と国際協力を実現

JIFH協力企業
パン・アキモト

文：パン・アキモト　仁平賢一氏

【写真】2015年ネパール大地震緊急支援で救缶鳥を受け取り食する子どもたち【下】2014年フィリピン台風支援で現地で救缶鳥を配布する秋元社長（ハンガーゼロ・特別大使）

“176万食を廃棄！”昨年3月、毎日新聞に全国47都道府県と20の政令市が過去5年間に廃棄した災害備蓄食の集計が掲載されました。それ以外の自治体や企業、家庭も含めると備蓄食だけでどれだけ多くの食べ物が捨てられているのかわかりません。私たちは今年創業70年目を迎えるパン屋ですが、「おいしく食べて笑顔になって頂けるように」と作ったパンが、食べられずにゴミになってしまうことほど悲しいことはありません。

そんな私たちに22年前、大きな転機がありました。阪神淡路大震災の時に送った約2000食のパンが半分以上食べられずに廃棄されてしまったのです。神戸という大都市を襲った災害の混乱の中、賞味期限の短いパンはあまり活かされることはありませんでした。「美味しくてやわらかく、なおかつカンパンのように長期保存が出来ないの？」との被災者からの声が形になったのはそれから1年後のことです。

世界で初めての柔らかい「パンの缶詰」は、栃木にある田舎のパン工場から生まれました。新潟の中越地震などを経験し、少しずつ「パンの缶詰」は知られるようになりました。しかし賞味期限が伸びたことによって、再び「食べられずに捨てられてしまう」という備蓄食ならではの問題に直面しました。冒頭にあったように自治体や企業では大量の備蓄食を置いていますが、その多くは賞味期限が切れると廃棄されてしまいます。防災訓練などで配布されたとしても、結局受け取った人が捨ててしまう場合も多いようです。

メッセージ文で被災者を激励

日本では捨てられてしまう備蓄食を賞味期限を残した状態で回収し、世界の飢餓で苦しんでいる人たちや、災害で食べ物が不足しているところに届けることが出来るのが「救缶鳥プロジェクト」です。災害が起きた時、ライフラインが止まっていても缶を開けるだけで手軽に食べることが出来ます。このプロジェクト実現のために、日本国際飢餓対策機構が国内外の災害支援ネットワークを提供、緊急食料支援を行っています。幸いにも災害にあわなかった時は、日本の優しさを飢餓や災害で苦しんでいる人に届けることが出来るのです。「救缶鳥プロジェクト」は食べ物を送るだけではありません。東日本大震災で全国の救缶鳥が被災地へ送られましたが、「缶詰に書かれているメッセージに励まされました」という多くの声を頂きました。

私たちは食べ物だけで生きているのではありません。困難なときほど人の優しさに触れることによって生きる希望が持てるのではないでしょうか。備蓄とちょっとした「優しさの支援」。自分のために、そして苦しんでいる人のために一緒に始めましょう。

※資料請求は、パン・アキモトまで
TEL:0287-65-3558国際義援事業本部

パン缶と水の備蓄可能なハンガーゼロ自販機の設置者を求めています。詳細は大阪事務所まで。

救缶鳥プロジェクトのしくみ

※小容量の「救缶鳥Jr(ジュニア)」は2年半備蓄となり、回収時のディスカウント（下取りによる割引）はありません。しくみ図はパン・アキモト資料より作成。

2016年に緊急食料として届けられた救缶鳥25,190缶（パン・アキモト統計）

支援者の皆さん（カルフォルニア州サクラメントにて）

アメリカと日本をつなぐ『愛の手』

特命大使　近藤高史

藤川・近藤両特命大使

ＮＰＯ団体「Ａｉｎｏｔｅ International（愛の手インターナショナル）」は、日本から8,500km離れた米国西海岸のサンフランシスコにあります。中心となって活動して下さっているのは、JIFH特命大使の藤川武彦さんご夫妻です。

藤川さんは渡米後40年以上、サンフランシスコを拠点にビジネスをしてこられました。現在は奥さんと二人で、カリフォルニア州で正規に登録されたNPO団体「Ainote International」を立ち上げ、アメリカから日本国際飢餓対策機構を支援する活動をして下さっています。

具体的な活動としては…

(1) JIFHを通して世界の飢餓と貧困の問題解決のために、アメリカ国内で募金を募る。

(2) 毎月730通余りにおよぶ「飢餓対策ニュース」を米国内の日本人・日系人支援者に発送する。

(3) 年に数回日本から米国を訪れるJIFHの親善大使による、チャリティコンサートの企画・運営などです。

日系人社会にアプローチ

全米には100を越す日本人・日系人のキリスト教会があり、サンフランシスコ近辺でも10カ所以上そうした教会を中心とした日本人コミュニティがあります。そこに集う方々を中心に活動を続けておられます。

世界の貧困の中にある子どもたちを継続的に助ける「チャイルドサポーター」として、現在アメリカで10人の方が支援に加わり、12人の子どもと地域を支えてくださっています。

また昨年の熊本地震のような災害があった時には、被災した日本人同胞のために多くの緊急災害募金がこの「Ainote International」を通して、日本へ届けられました。

作業する藤川夫妻と発送されるニュースレター

藤川さんご夫妻

世界の飢餓・貧困また災害に苦しむ人々と共に歩むJIFHの活動を心にとめて、距離は遠く離れていても心は近い家族のようにご支援下さっている米国在住の皆さん、その橋渡しを担う藤川さんご夫妻による「Ainote International」の働きに、心から感謝を捧げます。

ツアーの案内（昨年）

JIFH親善大使 森 祐理 チャリティコンサート in アメリカ 2017

これまでにもカリフォルニア州、ハワイ州などで開催してきましたが、2017年は3月24日～4月3日にオレゴン州ポートランド、ワシントン州シアトルにて、7～8回のチャリティコンサートを開催する予定です。

飢餓対策ニュース　第 320 号　発行日 2017 年 2 月 20 日（毎月 20 日発行）定価 15 円

日本国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry：略して JIFH）は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体（NGO）です。1981年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合（Food for the Hungry International Federation）の一員として、20ヵ国 60のパートナー団体と協力し、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、「こころとからだの飢餓」に応える活動をしています。

★Tポイントを利用して「南スーダン・マブイ小学校給食支援」ができます。現在までに3530020ポイント（円）のご協力（3230件）がありました。募金はTポイント募金で検索

新発売のペルーのチョコとグッズのセットで活動支援

チョコレートはペルーの生産者への支援、かわいいフェルトのストラップは障がい者就労支援施設で働く人の収入に、そして収益の一部がチャイルドサポーター活動に寄付されるセットです。

①ダークチョコレートシリーズ

乾燥させた果実を一粒ずつココアパウダーでコーティングした大変に美味なチョコレートです。1袋 40 g入り¥380（日本で加工）

クリーミーカシューナッツ / シナモン&レーズン / ブルーベリー / クランベリー

以上 4 種類から味はおまかせ 1 点。

②かわいいフェルトグッズ

サイズ 6 ～ 7㎝　¥600　デザインはおまかせ 1 点

①②合わせて 2 点を送料込み 1,000 円でお届けします。在庫が無くなり次第販売終了。

【問合せ】キングダムビジネス

〒540-0026　大阪市中央区内本町1-4-12NPO ビル402

TEL :06-6755-4877　FAX :06-6755-4888

メール : customer@kbwin-win.org

Web : キングダムビジネスで検索。

JIFH 海外サマーキャンプを開催！

8月中旬にボリビアで開催いたします。案内を希望される方は、メール又は電話で東京事務所までお気軽にお問合わせください。

問い合わせ：電話03（3518）0781

eメール：jifhtokyo@gmail.com

チャイルドサポーター専用サイトを公開

Child.jifh.org

事務所統合のお知らせ

当機構は国内業務再編の一環として3月より、東北事務所に代わり東京事務所が、広島事務所に代わり大阪事務所がそれぞれの地域の担当をすることになりました。これに伴い東北・広島各事務所の職員も異動いたします。

支援者の皆様にはご迷惑をおかけしますが、これを機に地域の支援者様との密接な連携を保ちつつ、新たな気持ちで世界中の物心両面の飢餓撲滅に取り組んで参ります。何卒ご理解の上、今後ともご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

なお今後①東北事務所へのお問合せは東京事務所②広島事務所へのお問合せは大阪事務所で受けさせていただきます。

2017年2月末日

一般財団法人　日本国際飢餓対策機構

理事長　岩橋竜介

Child Supporter チャイルドサポーター お申込用紙

今すぐ▶▶▶支援のお申し込みができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。

お電話でも申し込みできます。事務局直通電話 072-920-2226までおかけ下さい。

チャイルドサポーター申込書

フリガナ
氏　名（グループの代表者名）　［男・女］

所属団体名（グループ支援の場合）

フリガナ
住　所　〒

電話　e-mail

支援方法（☑ご希望の方法をお選びください）

☐ 郵便振込（ATM80円～）　☐ 郵貯自動振替（手数料25円）　☐ 銀行自動振替（手数料100円）

※クレジットカードからの申込はweb よりお願い致します。

☐ 子どもを支援します。
月額 1 人 4,000 円

____人 紹介してください。

国の希望
第 1 希望 _____
第 2 希望 _____
※ご記入がない場合は「指定なし」といたします。

性別の希望　［男・女・どちらでも］※○で囲む

子どもからの手紙は日本語への翻訳が［必要・不要］※○で囲む

☐ 活動を支援します。
月額 1 口 1,000 円を____口申し込みます。

今回のみの募金は郵便振替 00170-9-68590まで通信欄に必ず「チャイルドサポーター」と明記下さい。

FAX・072-920-2155

■発 行 者　岩橋竜介

■発 行 所　一般財団法人　日本国際飢餓対策機構

ハンガーゼロで検索！

Webサイトアドレス　http://www.jifh.org/
eメールアドレス　general@jifh.org
フェイスブック　https://www.facebook.com/hungerzero

■募金方法　※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウエブサイトで
●郵便振替　00170-9-68590 ／日本国際飢餓対策機構
●他の金融機関からの自動振替●クレジット、デジタルコンビニ

今すぐ募金ができます！　銀行からの自動振替　クレジットカード決済　コンビニ店頭で現金振込　かざして募金

大　阪（広島）　〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1　TEL (072)920-2225　FAX (072)920-2155
東　京（東北）　〒101-0062 千代田区神田駿河台2-1 OCCビル 517 号室　TEL (03)3518-0781　FAX (03)3518-0782
愛　知　〒460-0012 名古屋市中区千代田 2-19-16 千代田ビル3F　TEL (052)265-7101　FAX (052)265-7132
沖　縄　〒900-0033 那覇市久米2-25-8　メゾン久米 202号　TEL (098)943-9215　FAX (098)943-9216
ＵＳＡ　Ainote International c/o Mr. Takehiko Fujikawa　8010 Phaeton Dr. Oakland, CA94605　TEL(510)568-4939　FAX(510)293-0940

毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所（八尾市）、生活愛、関西地区のボランティアの皆様が発送作業の協力をして下さっています。

「かざして募金」はスマートフォンからご利用できます。募金は、ソフトバンクモバイル（株）経由となります。詳しくはウエブサイトをご覧ください。